

玉村竹二編

五山文學新集

第三卷

東京大學出版會

學術書刊行基金

編者略歴

明治44年 名古屋に生る
昭和10年 東京大學文學部國史學科卒業
同 年 東京大學史料編纂所員
現 在 東京大學史料編纂所教授

著 書

『五山文學』至文堂
『夢窓國師』平樂寺書店
『圓覺寺史』春秋社（井上禪定共著）

現住所 東京都杉並區上荻4丁目4番5號
杉並コーポラス303號

五山文學新集 第三卷

1969年3月31日 發行

定 價 7500 圓***

檢 印
廢 止

© 編 者

たま ひろ たけ じ
玉 村 竹 二

發行者

福 武 直

發 行 所 財團法人 東京大學出版會

113 東京都文京區本郷 東大構内 (811) 8814・振替東京 59964

ヨシダ印刷・新榮社製本

3395-86137-5149

序

本書刊行の緒に就いてから、大略滿三年、第一卷が世に出てから、約二年を經過し、こゝに漸くその第三卷を送り出すこととなつた。本書の全刊行計劃（六卷）のうち、やつと半ばに達したこととなる。しかし物事は三分の二を成遂げて、しかるのち半途に達したと思はなければならないことが多いから、これからの三卷分三年は、今迄以上に苦勞が多いことと思ふと、そゝろに溜息がつかれる。史料出版といふことは、全く並大抵のことではないとつくづく考へ込んでしまふ。

既に第一卷の序に詳述したやうに、かつて上村觀光居士によつて刊行された『五山文學全集』には、五山文學の一流作品が、ほぼ網羅されて、大正初年以來、學界を益すること多大であつたが、惜むらくは、もう一步といふところで中絶してしまつてゐる。且つ文學作品としての價值以外に、歴史の史料としての價值を認めるとすれば、なほ更多くの未刊の五山文學作品があり、そのうちには一流のもので、まだ一般世人の目に觸れることなくして埋もれてゐるものも一二に止まらない。これは斯學のために甚だ遺憾である。どうかして、これらを公刊したいといふ趣旨から、戦前に於て、既に元史料編纂所長（當時は史料編纂官）森末義彰氏が、この集の企畫を立て、その手始として、横川景三の『補庵京華集』（本集第一卷所收）を手がけ、原稿作成の段階まで行つたが、戦争によつて、その計劃は挫折した。それを昭和四十年春、前史料編纂所長竹内理三氏が復活され、東京大學出版會から刊行されるこ

とになつた。それが本叢書であり、名づけて『五山文學新集』といひ、未刊のものを優先し、既刊のものとも雖も、よい底本を得れば、これをも取上げ、時には、泥中の白蓮の如き、未知の作者の珠玉篇をも、その間に交へて収録し、世に紹介しようとするものである。

未知の珠玉篇とは、例へば第一巻に附録として收めた曇仲道芳の四六文集などがこれに相當するが、本巻に於て、水戸の彰考館に於て見出した建長寺の僧侶庵全雍の詩集を收めたのも、その積りである。今後各巻に一二篇づゝ位、巨冊名篇の間に交へて、このやうな零細ながらも、捨て難い作品を入れて行かうと思ふ。

天境靈致と東沼周巖の作品は、豫てから『五山文學全集』に當然入るべくして惜しくも漏れた名品として、本集の企畫に於ては、まつ先に收めたいと思つてゐたもので、前者は南北朝時代、後者は室町時代中期のもの、その間に介する龍山徳見の作品も、天境靈致より稍時代が上がるが、同じく南北朝時代のもの、龍山は在元五十年、古林清茂に就て、禪林偈頌の粹を傳へ、門下に義堂周信・絶海中津を出して、五山文學の最盛期を醸成する緒を作つた人である。巻の最後に收めた雪村友梅も、鎌倉時代末から南北朝時代初期にかけての人で、龍山と酷似した行履を有し、在宋元二十餘年、これより先、一山一寧に師事し、かの地では公卿大夫一流の人物と交友し、一轉して間牒の嫌疑により獄に繋がれ、函谷關西に逐はれ、蜀の地に謫せられ、備さに辛酸を嘗めつくした人である。日本の禪林文學の始祖といはれる一山よりの傳統を承け、元の地ではさきに擧げた古林と交友關係に在つた人である。初期の禪林文學と、五山文學勃興期の橋渡しをする人として、その作品は重要である。また第二巻所收の友山士偲・本卷の龍山徳見と共に、いづれも中國語法に習熟した人の作品として、注目すべきであらう。これを收め得たことは、喜ばしい限りである。たゞ底本に、ずば抜けてよい本がなく、どの本にも同じ箇所錯簡があり、校訂には困却し

たが、印刷校正の段階になつてから、はからずも建仁寺兩足院本が、かなり採るべき所のある良質の本であることが判明、再校の際に、これと對校出來たのは、誠に幸であつた。その直前に挿入した邵庵全雍の作品については、前述の通り。これは室町中期關東の作品として異色を放つ。

この巻の校訂刊行に當つても、また例によつて、和漢の文獻に通曉した史料編纂所の碩學泰斗太田晶二郎氏の御示教を蒙ること、ますます多大である。外典故事の出典、難解な文字の解讀については、すべて同氏の御教導に遵つた。それでもなほこの方面で誤謬が残つてゐるとしたら、それは不覺にも同氏に教を請はずに、さかしらにも自己流でやつてのけたためか、或は教を受けても、その趣旨を誤解したために生じたもので、その責任は専ら私に在るといふべきである。玆に更めてあつく御禮を申述べる。

次に印刷校正については、第一卷・第二卷に引續いて、千葉大學の田中久夫氏と史料編纂所の今枝愛眞氏が、多忙な時間を割いて、助力を惜しまれなかつた。殊に本卷では、田中氏は全卷に互つて、綿密な原本當りをして下さつた。そのため、急いで書寫した原稿の一行分脱落の箇所などを發見され、危いところを救はれた場合が一二に止まらなかつた。兩氏にあつく謝意を表する次第である。原稿の書寫は、今回も大部分は私自身の手によるが、『無規矩』の半分は、二十一年前、今枝愛眞氏の手を煩はしてゐる。更に諸本の本文採訪については、『流水集』『黃龍十世錄』は東京國立博物館の海老根聰郎氏、『寶覺眞空禪師語錄』『雪村大和尚行道記』は田中久夫氏、『無規矩』は史料編纂所の高澤實氏、『建長寺龍源庵所藏詩集』（邵庵老人詩）は同所の針生邦男氏に託して、寫眞撮影をしていただいた。最後のものの撮影に就ては、史料編纂所の菊地勇次郎氏の斡旋に負ふ所が多い。如上の諸氏にあつく御禮申上げる。

更に東京大學史料編纂所には、『寶覺眞空禪師語錄』を底本として、内閣文庫には『寶覺眞空禪師語錄』『岷峨集』『寶覺眞空禪師語錄』と『岷峨集』を合せた本』『流水集』を校訂本として、建仁寺兩足院には『流水集』『無規矩』を底本として、『岷峨集』『寶覺眞空禪師語錄』を誤り題した本』『黃龍十世錄』を校訂本として、彰考館文庫には『建長寺龍源庵所藏詩集』を底本として、南禪寺聽松院には『無規矩』を校訂本として、大東急記念文庫には『黃龍十世錄』を底本として、瀧田英二氏には『岷峨集』(元祿木版本)を底本として、閱覽撮影利用を許された。また挿入寫眞掲載について建仁寺兩足院・正木孝之氏・南禪寺聽松院・大東急記念文庫の御承認を得たことも幸甚の至である。これらのこと總てを含めて、建仁寺兩足院の伊藤東愼師、南禪寺正因庵の櫻井景雄師、同寺聽松院の武田文英師、内閣文庫の福井保氏、彰考館の福田耕二郎氏、大東急文庫の西村清氏、相國寺玉龍院本『雪村錄』の存否調査に御盡力下さった鹿苑寺の村上慈海師、阿部芳春氏刊行の謄寫版摺『寶覺眞空禪師語錄』及び元祿版『岷峨集』を貸與された瀧田英二諸氏の御懇情にも深く感謝する次第である。なほ史料編纂所長挑裕行氏・東京學藝大學の安良岡康作氏・廣島大學の中川徳之助氏・東福寺内願成寺の福嶋俊翁師・南禪寺正因庵の櫻井景雄師・駒澤大學の葉貫磨哉氏には有形無形の助言や激勵を賜はつた。殊にいつもながら、底本・校訂本の過半を占める建仁寺兩足院本の調査閱覽撮影について、終始絶大な便宜を與へて下さる同院主伊藤東愼師には、重ねて感謝の意を表する。

終に、この出版に際しては、東京大學出版會の中平千三郎・成田良輔・齋藤至弘・公文京子の諸氏に、一方ならずお世話になり、御迷惑もかけた。ここに改めて御詫をし御禮を申上げる。

なほこの出版は、文部省昭和四十三年度科學研究費補助金(研究成果刊行費)の交付を受けて成就したものである。

昭和四十四年三月二十一日

玉
村
竹
二

凡 例

一、五山文學新集は、鎌倉時代より江戸時代に亘る日本五山禪林の漢文學作品を、校訂刊行するものである。その作者が宋・元・明の來朝僧であらうと、日本僧であらうとを問はず、また一部の詩文集のうちに包含される法語・語錄的な部分をも削除せずに收載するのを基本方針とする。

一、本卷には天境靈致・龍山德見・東沼周巖・邵庵全雍・雪村友梅の作品集を收めた。

一、卷末に各集の解題を附した。その解題は作者の傳記、底本及び校訂本に用ひた諸本の解説、作者關係宗派圖より成る。

一、『流水集』の底本たる建仁寺兩足院本は、本來五冊本であつたらしいが、その第一卷（語錄の部）が失はれ、第二卷より第五卷までの四冊しか残つてゐない。その缺失部分は、同じく兩足院本の『東沼和尚語錄』及び『流水集』（拈香の部）が、これに相當すると思はれるが、それを第一卷の位置に移すことは差控へ、第二卷より配列し、語錄拈香の部（即ち第一卷の内容に當ると思はれる部分）は、その後位置した。

一、邵庵全雍集についても一言を要する。邵庵といふ僧は、關東禪林の全く無名な一文筆僧に過ぎないが、その作品は、まんざら捨去るに忍びないものがあり、殊に應永初年から文安・寶徳頃の關東禪林の様子を知る上に史料として貴重なものであるので、紹介の意味で、敢て收録した。それも邵庵のものと一聯で雜錄様にまとめられた

『建長寺龍源庵詩集』といふ寫本から、邵庵のもののみ抽出するよりは、相互に關聯のあるものばかりなので、作者不詳のものまで含め、柏巖繼趙の作品集『水南詩集』及び『山林文房集』、その他の詩軸の書留まで、殆ど全部を附收した。

一、『黃龍^{おうれう}十世錄』は、龍山德見が、派祖黃龍慧南より自己に到る十世の語要を輯錄して、かく名づけたものであるが、勿論その大部分は龍山自身の作品である。したがつて、五山文學の範疇から、はみ出すが、これら南宋諸禪僧の語要も、そのまゝ收載した。なほ本書に於ては、はじめて底本に「五山版」を使用した。

一、雪村友梅集に於ては、『岷峨集』の部は、既に『五山文學全集』第一卷に收錄されてゐるが、ある系統の本によれば、『寶覺眞空禪師語錄』と『岷峨集』とを合せて、『岷峨集』と題したのもあり、『語錄』と不可分の關係があるので、重複をいとはず、本『新集』に再び收載した。

一、東沼周巖の『流水集』四冊本（五冊のうち第一冊缺失）の底本は、本卷に用ひたもののうち、最も古寫本なるにより、校刊に當つて、用字は悉く底本に極めて忠實ならんとし、龍山德見の『黃龍十世錄』は五山版を底本としたために、これも前書と略々同等の忠實度を持し、天境靈致の『無規矩』、邵庵全雍の『邵庵老人詩』をはじめとする『建長寺龍源庵所藏詩集』の二本、これに次ぎ、雪村友梅の『寶覺眞空禪師語錄』は、底本が新寫本なるにより、それ程の嚴密さを保持せず、適宜『康熙字典』の字體に改めた。但し改行・空白等については、どの本も同様に嚴密に底本の體裁の再現に力め、闕字・平出・擡頭は、悉く底本のまゝ示した。

一、詩文の題は四字下りに一定し、七言絶句の場合、底本に於て、詩題が詩の後の餘白に記されてゐることがあるが、校刊に際しては、それらを悉く詩の前に移し、四字下りにして示した。

一、底本の讀點にとらはれず、新たに讀點と竝列點とを施し、底本の返點送假名(殆どないが)は省略した。但し振假名は解讀に便益ありと認めた場合にのみ、これを殘置した。

一、底本の字傍の朱點・朱圈は、原則として頭書に註した。

一、底本の朱引は省略した。

一、用字は、なるべく底本通りにするやうにとめた。但し前項に觸れたやうに底本の新古にしたがひ、多少緩急の差をつけた。左の括弧内に示す文字は各本に共通して、括弧外の字體に統一した。

圓(円を用ひず)	與(与)	圍(围)	離(离)	學(学)
劉(刘)	對(对)	關(関)	數(数)	聲(声 邑)
覓(觅)	含(含)	來(来)	盡(尽)	圖(图)
乘(乘)	昂(昂)	雙(双)	舊(旧)	舉(举)
實(実)	璵(珣)	嶼(屿)	點(点)	籬(篱)
桑(桑)	獨(独)	濁(浊)	答(荅)	厭(厭)
處(処)	還(还)	流(汙)	壓(壓)	佛(仏)
拂(払)	燈(灯)	亂(乱)	屬(属)	囑(嘱)
邊(辺)	廬(庐)	爐(炉)	并(并)	所(所)
回(回 回)	凡(凡)	壑(壑)	擇(択)	澤(沢)
釋(釈 尺)	國(国)	前(前 庵)	勢(勢)	要(要)

畫(画 畫 昼)	蘆(芦)	承(美)	函(函)	涵(涵)
涼(涼)	祇(祇「たゞ」「つゝしむ」の場合のみ)	龍(竜)	龜(亀)	
嘗(嘗)	告(告)	浩(浩)	號(号)	萬(万)
寶(宝)	濱(濱)	壹(壹)	會(会)	周(周)
寶(寶)				

一、同一文字にして二體以上を併用した主要なものは左の通りである。いづれも底本のそれぞれの箇所の用字に従つたものである。

歸 婦 販	叢 叢 叢	蓋 蓋	筆 筆 筆	等 等
遷 迂	得 得	聞 聾	虛 虛	鼎 鼎
船 船	算 算	答 盒(答は用ひず)	柏 栢	侍 侍
時 眈 眈	詩 訖	紙 帑	節 節	館 館
最 取	箇 個 个 ケ	楞 稜 稜	德 慮 佻	庵 菴
役 役	秋 爍 穠	靈 灵	總 総	摠 揔
蘇 蘓	書 昏	疏 疏	徒 徒	草 艸
年 季	聰 聰	事 亼	鬢 鬢	條 条
寶 珣 窳(宝は用ひず)		後 后	洲 洲	州 州
國 圀 國(国は用ひず)		淵 淵 困	養 狼	也 芒

花	花	稿	邁	爾	稱
蒼	藥	藥	迓	尔	稱
華				(尔は用ひず)	
雪	陽	裏	腸	裏	裏
露	易	裡	腸	裏	裏
野	臺	宜	誼	圖	圖
堊	臺	宜	誼	圖	圖
峯	臺	宜	誼	圖	圖
峯	臺	宜	誼	圖	圖
岸	峯	海	溪	篇	篇
岸	峯	海	溪	篇	篇
梅	潛	會	村	窓	窓
株	潛	兕	邨	窓	窓
毒		(會は用ひず)		窓	窓
床	嶽	幹	以	似	似
牀	岳	幹	目	侶	侶
富	街	天	春	辭	辭
富	街	芟	菴	辭	辭
道	貌	即	修	須	須
街	貌	即	修	須	須
韻	松	嶺	妙	群	群
韻	窠	嶺	妙	羣	羣
勻	泰	嶺	妙	羣	羣
香	嗣	體	獨	無	無
薜	屈	體	獸	无	无
堂	珍	居	洛	栖	棲
坐	玢	居	維	棲	棲
嚴	閭	笑	巖	雁	鴈
ム	眚	咲	岩	鴈	鴈

一、躍り字は、古寫本たる『流水集』四冊本『流水集』(拈香)(一冊本)『邵庵老人詩』に於ては「こ」の體を用ひ、その他の本では「々」を用ひた。

一、底本の文字の誤謬を正すために、これと換へるべき文字それ自體、またはその文字を含む校訂註は「」を以て、その他の校訂註《(マ、)》(衍カ)《(脱アルカ)》(二字脱カ)等《及び説明註《固有名詞の傍註を含む》は()を以て括つた。

一、雪村友梅集の『寶覺眞空禪師錄』に於ては、底本たる東京大學史料編纂所本（相國寺本）と建仁寺兩足院本（茂源紹柏識語本）とが、相異なる系列をなし、相互に相補ふべき箇所が多いので、この二本の對校がこの集の校訂の根幹をなす作業で、特別な意味をもつと考へる。よつて、他本との異同と區別して、兩足院本との文字の異同を示す校訂註には『』を用ひ、そのうち明かに底本の文字よりもすぐれて、採るべきものには、『』の下に*印を付して、讀者の判斷に便した。

一、校訂者の私見による異同註は、相當確實に正鵠を得たと思はれるものでも、他本との異同註と識別するため、その註に「カ」を附して、私見なることを表現した。

一、底本中の文字を書くべくして書かなかつた空白は、その状態を存して（マ）と傍註した。また蠹損汚損等によつて不明となつた文字には、その字數に應じて□□または□□□、墨抹には■の符號を本行中に入れた。

一、底本に抹消あるときは、それが如何なる方式に據つてゐようとも、校刊にあたつては、左傍に「こ」を施す方式に統一した。而して抹消した文字も本行中に示した。

一、底本の文字に、字畫上の疑問はなく讀み得ても、文意が通じかねる場合には、その部分に（マ）を傍註した。
 一、底本に於て、傍に補書したものは、その位置において傍書のまゝ示し、その脱落を挿入すべき箇所を、底本が「。」を以て示してゐる場合は、その通りに傍書のまゝに組み、行の中央に「。」印を挿入し、若し底本が、その挿入すべき箇所を示さない場合は、校訂者が私意を以て、その補入すべき箇所の行の中央に「△」印を付した。校訂の結果、底本の脱落を他本を以て補ふ場合、補ふべき文字を「」に括り、挿入せらるべき箇所に、同様に「△」印を附した。また底本に脱落があり、しかも脱落した文字の不明である場合は、（脱アルカ）と傍註し、

若し脱落の箇所が歴然たる場合は、矢張り同じく「△」印を附した。これがないときは、その句のどの箇所に脱字があるか、確認出来ないものと承知していただきたい。また長大な補入に限つては、その部分を「」に括つて本文中に挿入し、頭書にその旨を註記した場合もある。

一、底本に於て、文字の順序が顛倒してゐるとき、「○乙」の符號を附して、これを正すべきを示してある場合には、その符號に従つて、これを正しい順序に改めた。

一、闕字等による底本の字あきの箇所が、行末・行頭に來た場合は、闕字か平出か、行頭の一字下りか、區別が出來ないのを慮つて、このやうな場合に限り、行間に「○行末」「○闕字」「○平出」等と註した。

一、底本に類題のないとき、他本にこれがある場合は、その本の表現に従ひ、『』に括つて類題を設けた場合がある。また他本にもないときにも、どうしても必要と思はれる箇所には、私意を以て類題を設けた。この場合には「」を以て括つた。

一、人名・地名・寺院名・書名等の傍註は、概ね各作品毎に、更めて繰返し註した。本書の如きは、通讀されるよりも、必要な作品のみを、適宜摘出して讀まれることの方が多いと判斷したから、煩をいとはず、細かく傍註した次第である。

一、日本禪僧及び中國の教・律・禪僧、並びに日本に於て南宋・元・明の影響を強くうけた禪宗以外の宗派の僧侶（例へば北京律の泉涌寺一派、天台宗または淨土宗ともいふべき廬山寺・三鈷寺の一派等）の名號は、道號と法諱と四字連稱するのが正儀である。よつて道號が本文に出たときは、法諱を註し、法諱が二字完全に出たときは、道號を註し、法諱の下の一文字のみ出たとき、または全然別の稱號（寺號・勅賜諡號・別號等）が出たときには、共に道號・法

諱を四字連ねて註した。このうち、道號のみ二字を註するときは、法諱の註と區別し、それが道號の註であることを明示するために（・天境）の如く、道號の註の上に「・」點を附した。また法諱の上の一字（系字）が判明しない場合が多いが、さういふ場合の法諱の註には（一容）の如く、「一」を以て、系字一字を闕いてゐることを示した。

一、中國の禪僧の場合、南宋の初期以前には道號の制はなく、各僧の所居の山名・寺號・院號を冠し、または勅號を冠して稱呼する習慣である。若しこれを缺けば、却つて識別し憎くなるので、些か放縱の嫌はあるが、讀者の便を思つて、嚴密な意味では道號ではないが、それに準じて、これら山名・寺號・院號・勅號等を慣用のまゝ冠して、法諱と共に四字連ねて註した。雪竇重顯（山名）・東林常總（寺號）・臨濟義玄（院號）・大覺懷璉（勅號）等の如きがこれである。なほ、唐末・五代・北宋時代に、のちに道號の一要素となつた字の制が存した。これは本來俗制であるが、既に僧界にとり入れられ、雪竇重顯は「隱之」、大覺懷璉は「器之」、明教大師契嵩は「仲靈」といふ字をもつてゐるが、これらの「字」は法諱と連稱する習慣はなかつたので、本書の傍註には出て來ない。あざな

一、在俗日本人の姓名の註は、姓には名を、法名には俗姓名を註するのを原則とした。改名した人については、最も世に通つた名によつて統一した。このことは僧名についても同然である。足利義政は義成といふ名もあるが、義政に統一し、絶海中津は要關中津ともいひ、嚴中周噩は天助周祐ともいつたが、絶海中津・嚴中周噩に統一した。但し必要あらば、頭書に於て、これら別名の存在することを説明した。

一、頭書は、本文の標出ではなく、校訂上の必要事項と、傍註では意をつくさない場合の補註である。

一、東沼周噩の作品には、底本にも、他の校訂本にも見えない作品、所謂「佚文」がある。末尾に拾遺の部を設け

てこれを収めた。なほ『雪村大和尚行道記』は、底本たる『岷峨集』の元祿版に収められてゐるので、雪村の作品ではないが、便宜これを附載した。しかも元祿版では、大有有諸所撰の本文のみであつたのを、今回は、建仁寺兩足院所藏の古寫本により、大有の自註を加へた本と置換へて収載した。